

2024年度第9回 長崎大学経済学部 ファカルティセミナー

標記セミナーを下記の通り開催いたします。

多くの教職員、大学院生、学部生の参加をお待ちしております。

記

日 時：2025年1月17日(金) 14:30～16:00

場 所：経済学部 本館2階 中会議室

講 師：宇都宮 讓 准教授

演 題：なにが危険な川魚料理を住民に食べさせるか：
メコン川中流域における研究

要 旨：

本研究は、メコン川中流域における淡水魚食について、喫食有無と喫食頻度を左右する要因、および喫食から得る価値を推定することを目的とする。

本研究は、住民が上記料理によせる評価は高いという結果を得た。生態系サービスを求めて積極的に上記料理を食べる側面もあろうことも示唆する。また、食べる確率と理由は魚種ごとに異なるという事実は、喫食がもたらす危険を回避する方法を魚種毎に検討する必要があることを示唆する。

担当：研究企画委員会 <ecso@ml.nagasaki-u.ac.jp>

講演概要

本研究はメコン川中流域住民による淡水魚食について、喫食有無と喫食頻度を左右する要因、および喫食から得る社会経済的価値および同価値を左右する要因を推定することを目的とする。同域における淡水魚生食には、寄生虫感染による肝臓がんを発症する危険がある。淡水フグ食には、猛毒にて死亡する危険がある。流域国当局および国際機関は、啓発活動を実施し駆虫薬を配布、危険回避努力を継続する。それでも流域住民は、淡水魚を生食しまた淡水フグを食べることがある。先行研究は、とぼしい家計を埋め合わせるために、住民は魚をとって食べることを指摘する。とはいえ、致命的な結果をもたらす可能性がある料理を食べる理由を貧困にのみ帰することは、合理性にとぼしい。住民は生態系サービス（自然がもたらす社会経済的価値）を、淡水魚生食や淡水フグ食から得るゆえに、上記料理を食べると考えられるほうが自然であろう。

本研究は、クラチエ州（カンボジア）に住む住民を対象とする。同住民によるコイ科小魚 *Henicorhynchus siamensis*、コイ科大型魚 *Labeo chrysophekadion*、および淡水フグの一種 *Pao cochinchinensis* を用いた生食習慣を検討する。検討にあたって、われわれは2020-2022年に質問票調査（N=600）を実施した。質問票調査結果を用いて、喫食有無を確認するためにロジスティック回帰分析を、喫食する要因を検討するために分散分析を、魚種別生態系サービスに与える影響を検討するために、分散分析を各々用いた。

われわれは、以下に示す結果を得た。第一、直近1年間に喫食したことがある者割合は、*H. siamensis* (43-60%)、*L. chrysophekadion* (15-42%)、*P. cochinchinensis* (10%)であった。第二、*H. siamensis*は男性であることと好奇心が、*L. chrysophekadion*は家計状況が好転することが、*P. siamensis*は男性であることと好奇心、喫食経験とが喫食有無に作用する。第三、一人前あたり生態系サービスは、*P. cochinchinensis* (1.28USD/人)、*H. siamensis* (1.8USD/人)、*L. chrysophekadion* (3.5USD/人)の順に高かった。ただし、重量あたり生態系サービスは、上記逆順となった。上記結果は、生態系サービスを求めて積極的に上記料理を食べる側面もあろうことも示唆する。また、食べる理由は魚種ごとに異なるという結果は、喫食がもたらす危険を回避する方法を魚種毎に検討する必要があることを示唆する。